



# 蟹子

---

---

ミシェル・ボエボエ

---

## 同窓会

---

8/13 午後6:00 加山ホテル 5階 加山中学校 同窓会会場案内

メモを見ながらお盆の帰省ラッシュで満員の新幹線の中で北岡はニヤリと、

「は、あいつらも参加するって言うてたけど、10年ぶりやん。」

地元に戻れば必ずとっていいほど会う連中もいれば、  
同窓会でもなければ一生会うこともないかもしれない人もいる。

今回、参加の確認の連絡をくれた大西と、もうひとり、最近結婚したらしい原田の二人に会えるのが楽しみで仕方なかった。

東京をでた新幹線は昼過ぎには神戸につき、タクシーでホテルに向かう途中、ぐねぐねと続く山道をとった。

なんとも同じ道を走ったような気がしてうとうととしていたら

「あそこのホテルってまだ営業やってましたっけ？」

ふいに運転手がしゃべるので、  
「さあ、どうなんですかね？」  
とたいして意味も無く答えた。

「お一人で？」としつこく聞くので  
「ええ、そうですね。同窓会なんで」  
とまた、北岡はこういったやり取りに時間の無駄を感じてしまうタチで、愛想ない。  
ミラー越しに見える運転手の顔もぼうつとしてて、どこか人形のような感じだった。

ホテルには5時前には着き、メールで二人に連絡をとろうとロビーにいと  
「あ～拓ちゃん！ひさしぶり～！！」  
と甲高い女性の声。

・・・見覚えがない、しかし今日は同窓会だ、好みのタイプだろうが、なかろうが適当に話をあわせて損はない。

「おお～、ひさしぶり！やっぱ10年ぶりやと綺麗なっとなあ」

「ふうん」

なぜか、無表情でかえされた。普通、同窓会ともなれば前日から卒業アルバムでもみて予習復習をしておくものだが、実家による時間もなく直接きた北岡なので不意を突かれたらこんなもんだらう。

「おおい、拓～！こっちや～！」

振り向くと大西と原田が立っていた。

「なあなあ、お前今日なにできたん？」と原田

「タクシーよ、新神戸まで新幹線で駅からここまでで5000もかかっちゃったわ」

「・・・なんかしゃべり方ちょっとだけヘンやなお前」と大西

「そうか？」といった返事ですら、どこか関西弁らしくなかった。方言は少しずつ自分の意思とは違い変化してしまう。

ホテルでは立食パーティーでたいしてお酒も出ず、3人は安い居酒屋で2次会をやろうと、原田の運転する車で向かった。

「なあ、女、意外と少なかったな。別に先生としゃべることもないし、まあ今からが本番か？」とグネグネと山道を下り、町へ出た。

お盆ということもあり、居酒屋どころかスナックまで開いている店はなく、3人は仕方なくフィリピンパブへ向かった。

「ここなあ、9時までにはいったら1時間2千円飲み放題やねん！」とうれしそうに原田が言うので来たわけだが、どうみても40代の自称28歳と、胸だけはものすごく大きい女性の二人が席にきた。

大西が「フィリピンにはお盆ってあるんですか？」ときくのでなぜか話の流れでフィリピンでの怪談を聞けることになった。

## 引越し

---

「わたしがねエ～、子供のときなんだけど・・・」

日本語は十分たっしゃで、話もうまく3人は聞き入ってしまった。

彼女（自称28歳の方）が子供のころ、おおきな屋敷に引っ越した時の話だそう。

その家は木造で古かったが部屋数は多く、2人姉妹の妹の彼女は父親に

「好きな部屋をえらんでよし」

といわれ、おおはしゃぎで二階へいったそう。

走って部屋へ入り、ベッドにダイブしたり窓をあけたり、なにせすごく興奮して楽しかったらしい。

しかしある部屋の鍵のかかったクローゼットを姉がバーン！とあけた瞬間に

「ぎゃ～～～！！！」

という悲鳴が聞こえた。

両手をぶるぶるとふるえさせ、天をむきひっくりかえった姉をみて彼女は腰をぬかした。

「おねえちゃん、どう、したの？」

落ち着いた姉にきくと、狭いクローゼットのなかには太った黒人女性が見下ろすように立っていたということだ。

・・・

「え、それってどういう意味？幽霊なん？」

「そだよ、クローゼットに住んでるの」

## 病院 1

---

酔いもまわり、3人は昔話でもりあがる。

原田「まあ、俺は唯一こんなかで結婚しようし、何に対してもどっしり対応できるわな？」

北岡「えんちゃう、それで。」

「いや、拓はびびりやったよな？むかし。」

「むかして、幽霊屋敷いったときやろ？」

「そうそう、いったな、あんとき俺、懐中電灯の電池を予備で買っていったのに、つかへんかったやんな！」

大西「それって準備してる時点でびびってるやん。」

「ここ来る途中にな、お墓めっちゃあったやん？覚えとう？」

「ん～～？あったっけ？」

「あの墓の近くに、もうボロボロの廃墟になった病院あんねんで、有名やで。」

自称28歳「そこいこ～！！」

なんぞついてくるねん、と思いながらも4人は意気投合して肝試しに向かうことになった。

## 病院 2

---

山道をもどり、確かにお墓の横を抜け、  
林の中にその病院はまだあった。北岡は長旅に疲れ、早く実家に戻りたかった。

「うお、おお、ここやん、ほんまにあるやん。」  
若干、声がふるえきみで原田が言った。

北岡「じゃ、当然やけど、原田ひとりで屋上までいけや。結婚しとうし。」  
原田「は？意味わからんし。お前もこいや！」

28歳「二人でいいじゃん。ね？」  
大西「いや、全員でいこう」

大西はどうやら女性と二人で残されるのが嫌らしい。

結局4人で病院へと向かった。

町で飲んでいるときは半袖でちょうどよかったのだが、  
六甲から吹き降ろす山の風と、街灯のない林の中という条件では4人とも肌寒さを感じていた。

病院は3階だてで、割と小さく、窓もわれずに、思ったほど廃墟という感じではなかった。  
壁にスプレーで落書きが少しされていることを除けば、明日からでも使えそうだと北岡は思った。  
。

しかし、1階の裏口は壊されており、いかにも『ここからお入りください』と言わんばかりの入り口があり、  
4人は携帯の光を頼りに進んでいった。

コンクリートでできた床はゆっくり歩いても十分に音を反射させ、真っ暗な廊下は4人で歩くにも広すぎ、  
自然とくっついてしまう。

こういうときに女性（年上）は意外と頼れるもので、いつのまにか男3人は後ろで肩をすくめながらだんごのようになってついていった。

北岡「やばいやばいって、俺ほんまこういうの感じる性質なんよ。」

原田「・・・Me Too・・・」

大西「ちょ、お前らふざけんなや、そういうのがあかんねんで」

フィリピンからお越しの彼女はどんどん遠くへ進むのだが、ちょっと前から日本語ではなくなっていた。

原田「なんか、あの人、なんていうてるん？」

大西「日本語でいうところの『なんまんだぶ、なんまんだぶ』的なやつかな？」

お前から呪われるぞ、北岡はそう思った。

### 病棟 3

---

急に彼女が、足を止めた。

「ここから、声がきこえる」

大西「うそやろ!？」

原田「おい!拓!!入るなって!」

なぜか、北岡も声が聞こえた気がした。

[おきて、、早く、、おきて]

部屋に入り、そう呼ばれた気がしたとたんに、急に肩を下にひっぱられ  
ガクッとひざが折れ、その場に倒れこんだ!

『あれ、、この天井、、見たことある気がする、、。』  
朦朧とした意識の中、北岡はぼんやりと天井をみていた。

気がついた時には車に3人で乗っていた。

どこでどうなったのか、原田の運転する車の助手席に北岡、うしろに大西だけが乗っていた。

北岡「なあ、あのフィリピンの女の人?」

大西「ああ、先に送っといた。お前急に倒れたけど、なんか見たんけ?」

北岡「いや、見たっていうか、なんかようわからんわ・・・なんか・・・」

原田「うわ!!!!!!」

ギギギギギ!!!!

ドン!!!!!!

急ブレーキでコーナーをスリップした先に一瞬、山の斜面からすべるように  
女性がでてきたのを3人がみていた。

「やってもた!!!!!!」

しばらく呆然とかたまり、北岡が窓から外を確認した。



北岡「あ、大丈夫や！いけ！原田早くいけ！」

原田「は？なにがやねん！轢いてもたやん！けいさ、いや救急車やろ！！大西！電話しろ！」

北岡「ええから早くいけって！！」

大西「原田！後ろ見んな！！いけ！」

原田は2人の異常な反応を見て、とにかく車を走らせた。

混乱の中、信号まちで停車したとき、3人は見たものを確認しあった。

原田「おれ、あかんわ、轢いてもた、逃げてるし、やっぱりもどらな、」

北岡「いや、あれは轢いてない。ちゃんと歩いてたやん。大丈夫やった。な？大西？」

原田「大丈夫なわけないやろ！」

大西「う、うん、ガードレールの上、30センチくらいのところを歩いてた。」

「女は、ぼうっと浮かんでこっちを見てた。なんか言いたそうな、目をしてたわ。

」

「・・・帰ろう」　みながそう思った。

## 訪問者

---

北岡はこれまで1度も  
霊、自体をはっきりと見たことは無かった。

しかし、父親の正七（しょうひち）からは子供のころからよく聞かされていた。

### 明石の長屋での話

子供のころに住んでいたのだが、ほとんど記憶はない、ひとつだけ覚えているのは  
夜、母と寝ていたら血相をかえた正七が布団にダイブしてきたことだ。

小学生になってからその夜の事を聞かされたのだが、当時引越したばかりのその部屋には  
毎晩のように嫌がらせがあったらしい。

深夜の1時～2時ごろに玄関のドアを ドン ドン ドン！！と叩かれたり、  
近所の人もヒソヒソ話をしていたり、なにせ母は精神的にまいっていたらしい。

そこで、職場の後輩をつれて、ある晩、父は二人で玄関で酒を飲み、嫌がらせの犯人を待ち伏せ  
することにした。

ところが、まったくその時に限って嫌がらせはこず、二人で1升ビンをあけるまでのみ、  
結局、後輩を送りに家を出た。

帰ってきた正七はビールやら酒ビンで散らかった玄関を片付けていた。  
そこに、

ドン ドン ドン！！！！

！！ついに嫌がらせがきた！！

正七はすぐさまドアノブをにぎり勢いよくドアを開けた。

「ひっ」

という声とともに、見たことも無いばあさんが上に飛び上がった。

長屋は二階建てで部屋は2階だったため、おそらくは屋根の上ののっかっているのだろう、  
正七は玄関のうえにぶら下がる反対向きの顔を視界に入れながら、

虚勢をはって

「だれや、しょうも無いことしやがって、、、もうくんな、」  
と言い放ち、ドアをバン！と閉め、あとは息子の記憶どおり、妻と子の眠る布団へとダイブしたのだった。

どうも、その部屋には以前、老夫婦が住んでおり、どちらが先に亡くなったのかわからないが、残された方も後を追うように亡くなったようだ。

49日もたたぬうちの部屋に、引っ越してきた家族が北岡家だった。

部屋は押入れから、戸棚、トイレまで御札だらけだったのを、怖がりの正七はすべて剥がし燃えるゴミにだしてしまった。

その後も頻繁に老夫婦そろって嫌がらせにくるもので、とうとう引越してしまった。

## 箱 1

---

実家に無事着いた北岡はシャワーをあげ、1階の和室へ向かった。

まだほろ酔いではあったが、まずはこういう日は仏壇に行き、線香をあげるべきだろうと思った。

「原田と大西、無事に帰れたやろか・・・」思いつつ、ご先祖様にどうか悪いことが起きませんようにと拝んだ。

「おお！拓！お前だいぶ遅かったな！」

拓将の兄、英樹・・・彼は地元の鉄鋼会社に勤める32歳独身で、大のオカルト好きだ。毎月のように発売されるホラーのシリーズもののビデオを父正七と共に酒を飲みながら観るのが趣味の男だ。

「おにい、久しぶりやな。」

「お前ちょっと痩せたな、なんか顔、青いし〜。」

兄は他人のちょっとした変化に敏感に気づきやすく、なおかつ茶化すのが大好きだ。北岡は兄に今日みたものを説明した。

英樹「・・・う〜ん、まあ、ようあることやん、それは心の持ち方次第でそう見えたりするねん。それよりや、俺かってこないだめっちゃこわかってんて！！」

以下、英樹談。

俺なあ、彼女が台風の日につれの子の引越しがあるって言うからや、手伝いに来いって言われて、めっちゃ雨の中、車はしらせていって、途中ラジオが『ガーー！！』で壊れて、とにかくまず、彼女の家についてんな。

そしたら彼女の部屋って一番上の5階やねんけど、階段のところは屋根やいし、風すごいからビシヨビシヨにねれながらピンポン押してん。

やのに、出やがらんし、俺めっちゃピンポン連打してん。

ほしたら、玄関のドアノブがガチャガチャいうから、やっと中に入れるわって思ったら、これがまだ開けへんねん。

「おい！遊んどらんとはよあけや！」

っていっても無視やしな。

電話しても出んし。

こっちもドアノブガチャガチャやってて。のぞき窓を外から覗いてんけどなんも見えんし。

そうこうしてたら彼女から電話きて、「何しとん？」

ていうから

頭にきて、「お前こそ早よあけろや！！」ってどなってもて。

「え?? いまどこ? 英樹君、遅いから先に雪ちゃんの家に来てるねん。」

っていうねん。あいつ一人暮らしやから・・・俺、それ聞いて二段飛ばしで階段かけおりて車に飛び乗ってん!!・・・」

で?

北岡はどうでもいい兄の話につき合わされ、眠くなったので部屋に上がった。

## 箱 2

---

翌朝、彼は昼過ぎまで眠り、家族と食事を終え、自分の勉強机に座っていた。

懐かしいな、この机は兄からのおさがりで、ひとつだけ引き出しが鍵がかかったままでらっ  
んな・・・

あれ？そういえばあいつ、鍵はなくしたからって行ってたけど、何が入ってたんやろ？

北岡は引き出しをこじあけることにし、天板をドライバーではずし、中を確認した。

2ページだけ書かれた日記帳と、ジャポニカの落書き帳、コーラの匂いのけしごむ、、キン消し  
。

たしかに、どうでもいいガラクタがでてきた。

奥にはひとつ平らな箱があった。

「おい、服でも買いにいこうや。」

兄が後ろからやってきて、出かけようとしていた。

「ゴミしかないわ。この箱なんなん？」

「しらん、覚えてない、中身は？」

見つけたときにすぐに開けたのだが、何も入っていなかった。

ただ、箱は最近、引き出しに入れられたような感じで、これだけが新しかった。

兄「大事なもんは鍵かけなあかんからな、この机やった時、お前、鍵を探し当てて喜んでたで。

やから、そこに入ってるもんは全部お前のやつやろな・」

まったく覚えていない様子で・・・箱を引き出しにもどし、二人は買い物へと出かけた。

盆ということで、実家には親戚が集まっていた。

怖いもの好きの英樹は叔父や叔母にあうと、毎回、昔の話を聞いてよろこんでいる。それはかつて、お化け屋敷と身内の間で呼ばれていた長屋での話だ。

「おばあちゃんが生きてたころに一度だけ、泊まりにいったんやで。」

長男の英樹が生まれ、退院の祝いに父の姉と母がその家にきていた晩、正七は姉に相談を持ちかけた。

「前にも言うたけどな、わしの家な、ようでるんや、その、幽霊みたいなんが」  
もともと彼女は僧侶として寺で修行を積み、京都の大学で教鞭をとっていたこともある。そのせいかどうかは別として、その手の話はなんともないのである。

彼女は以前、電話で相談をうけた際に、仏壇を置くように勧めたのだが、正七は嫌がっていた。

正七の母は、退院祝い、というわけではないのだが、仏壇を用意してきていた。

「この部屋入ってすぐに、気持ち悪さを感じたから、正七、今日から仏さんをまつときなさい。」

渋々、という罰があたりそうだが、奥の部屋におき、お供え物を準備した。

ラップ現象。

一昔前はテレビ等で説明されていたが、最近は不思議と聞かなくなった言葉だが、部屋の照明がまさにそれで、

「ねえちゃん、この電気がようバチン！っていうねん。」

そう言いながら正七が電気のスイッチをカチンと引っ張ったとき、「ひっ！」と姉が耳をふさいだ。

ものすごいバチン！！とした音が聞こえたはそのときは彼女だけだった。

皆が寝床についてしばらくたった頃、

「あんたら、幽霊、見てみるか？」

不意に姉が真っ暗な部屋の隅を指差した。

ぼう~っと、青い、小さな光が2~3つ、部屋を飛び交っている。

正七は外からの光だと説明し、カーテンを閉めたのだが、

一旦は消えたように見えた光がまたしばらくして部屋の中を飛び始めた。

やがて、その光は一箇所にあつまり大きな丸い光となった。

家族がじーっと見つめる中、その光は上下半分づつ交互に光り始めた。

「ねえちゃん、ねえちゃん、ちょうどおっさんの顔になっとるやんか!？」

青い光はしばらく顔らしき形で点滅していたのだが、

次の展開を待つまでも無く

正七「ストローで吸ったるか？」

正七の母「やろから、メンドナイ、寝よっちゃ。」

あろうことか4人は飽きてしまい、青い光の演出を無視して寝ることにした。

メンドナイとは兵庫県但馬地方の方言で、恥ずかしい行動をしている相手に対して浴びせる嫌味な台詞だ。

光はその後どうなったのかは覚えていないらしいので、放置していたのだろう。

しかし、その晩の心霊現象はたつぷりと朝まで続くことになる。

仏壇を置いた部屋には叔母、祖母の二人が寝ていたのだが正七はふすま越しにキャッキヤとはしゃぐ声で目が覚めた。

「ねえちゃん、なんや、どないした？」

ふすまを開けると

「お前も聞こえとったんか」

部屋の中を、頭がペチャンコにへしゃげた子供のようなモノが何人もタンスの上や布団の上を飛び跳ねていたと言う。

ふすまを開けたときにはそれらは消えており何もなかった。

そのとき、正七の妻が「お姉さん、おかしい」

と指さした。

彼女は肩まで布団をかぶり、上を向いて寝ているのだが、

ずっと、手を布団から出し、腕を天井にまっすぐにむけて

1,

2,

3

と指で数えると、パタンと腕を落とす。

それをなんども繰り返す。

その異様な行動をみて他の3人は意味がわからずに見入っていた。

「ねえちゃん、どないしたんや!？」

応答はなく、眠っているように見えるのだが



急に布団をバサッと弾き飛ばした。

「はあ、はあ、ああ、」

低い男の声、見たことも無い形相、3人は恐怖でかたまってしまった。

肩で息をし、目をギョロギョロと回転させ、部屋を見回し、一言

「なんで仏壇なんか置くんじゃ！！」

正七は取り乱し、「ね、ねえちゃんが置けっってもってきたんやんか！」

じっと睨み付ける目はもう完全に他人の顔となり、肩で息する声はますます低くなり、明らかに何者かが『乗り移った』という状態だ。

「お前、この体がどうなってもええんか・・・」

その一言をきいた正七は思わず

「はん？やってみんかい！」

恐怖よりも怒りが頭にきた正七は言い放った

会話でのやり取りはここままで、とにかく3人は映画エクソシストさながら彼女に馬乗りになり念仏を唱え続けた。

やがて朝になり静かになった姉には記憶がなく、後で3人に説明をうけ、やはり直ちに引っ越すのが良いと結論づけた。

みほ

---

二日間だけ実家ですごした北岡だったが、すぐにまた東京に戻ってきていた。

彼には付き合って3年になる彼女、みほがいる。

戻ってきたら彼女にまず会う約束だったのだが、連絡が見つからない。

みほの友人に連絡を取ってもらったが同じく捕まらない。

思い当たる友人にあたるうちに、ふと彼女の言葉を思い出した。

みほの通いつけの占いの店に行ってみよう。